

グロブリン

(Glob)

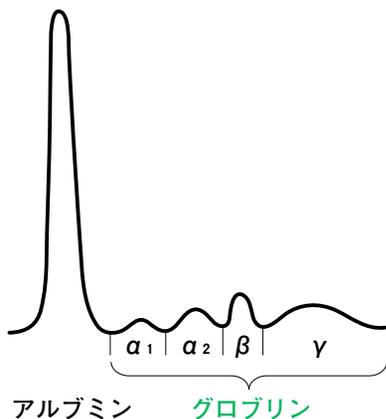
の検査について



日本臨床検査専門医会

日高 洋

蛋白分画



●グロブリンとは何ですか？

「総蛋白」-「アルブミン」の計算式で算出されます。

●グロブリンの値が低いときは、どういった病気が考えられますか？

免疫不全症などが考えられます。

●グロブリンの値が高いときは、どういった病気が考えられますか？

多発性骨髄腫、マクログロブリン血症、自己免疫疾患、慢性肝疾患（慢性肝炎、肝硬変）、慢性感染症、悪性腫瘍などが考えられます。多発性骨髄腫とマクログロブリン血症は、抗体を作る形質細胞の癌で、1種類の抗体が大量に作られます。自己免疫疾患とは、自己の組織に反応するリンパ球が活性化する病気で、関節リウマチ（関節が腫れて痛む病気）、橋本病（甲状腺が腫れる病気）などです。

●グロブリンの値が低いときあるいは高いとき、つぎに行う検査は何ですか？

蛋白分画（図参照）という検査を行います。この検査でグロブリンは、 α_1 グロブリン、 α_2 グロブリン、 β グロブリン、 γ グロブリンに分けられます。 α_1 グロブリンは α_1 -アンチトリプシン（トリプシンなどの働きを抑える）などで、主に肝臓で作られます。 α_2 グロブリンはハプトグロビン（ヘモグロビンと結合する）などで、主に肝臓で作られます。 β グロブリンはトランスフェリン

（鉄と結合する）などで、主に肝臓で作られます。 γ グロブリンはIgG（ウイルスなどと結合する）などで、主に白血球で作られません。

●蛋白分画で何がわかりますか？

多発性骨髄腫、マクログロブリン血症では、Mピークという特徴的な波形を示します。その他にも、急性炎症（急性感染症、心筋梗塞など）、慢性炎症（慢性感染症、自己免疫疾患、悪性腫瘍など）、肝硬変、ネフローゼ症候群（尿に大量の蛋白が出る病気）などの診断にも役立ちます。

●多発性骨髄腫、マクログロブリン血症が疑われた場合、次にどういった検査を行いますか？

免疫電気泳動という検査と免疫グロブリン量（IgG量など）の検査を行い、さらに疑いが深まれば、骨髄検査を行います。

●自己免疫疾患が疑われた場合、次にどういった検査を行いますか？

関節リウマチが疑われる場合にはリウマトイド因子など、橋本病が疑われる場合には抗サイログロブリン抗体などを測定します。

●慢性肝疾患が疑われた場合、次にどういった検査を行いますか？

肝炎ウイルスの感染が疑われる場合にはHBs抗原、HCV抗体などを調べます。また、超音波検査で肝臓の状態を調べます。